

遺族の喪失感癒やす

迫る2025 シビック

7

9部 訪問看護師の力

人は身近な人を失うと、大きな喪失感にさいなまれる。そういう体験をした人たちが集まり、心の内を語り合う会が、横浜市鶴見区医師会の在宅部門にある。

「ハナミズキの会」と名づけ、昨年4月に立ち上げた。2カ月に1回開いており、がんや病気で大切な人を亡くした遺族で、区内在住者ならだれでも参加でき

る。毎回10人ほどが参加するという。

訪問看護は基本、利用者の看取りをすると、関わりはほぼ終わってしまう。だが、総括責任者の栗原美穂子さん(49)らは「残された家族が、うつになっていく」といった話をよく聞いた。何とか支えになれないか、と考えた。

同会では、各参加者が亡くなった人の思い出話をしたり、自分の気持ちを吐露したりする。互いに共感し合い、重い心を徐々に軽くしていく。「外出できる場がある、というだけで意味がある。笑顔のなかった方

に、笑顔が見られるようになりませう」と栗原さん。

世話人が入り、必要に応じて



亡くなった夫の担当看護師だった本多幸子さん(右)と話す長谷川和子さん(横濱市鶴見区)

じコメントをする。栗原さんのほか、がん患者らの心身の痛みを和らげる「緩和ケア」が専門の平和病院の高橋修院長(62)や緩和ケア認定看護師の本多幸子さん(50)、臨床心理士や家族を亡くした経験のある一般女性もいる。

これまで4回参加した長谷川和子さん(74)は、2012年11月に夫の淳一さん(享年74)を胆管がんで亡くした。本多さんらが、亡くなる直前の約20日間、ほぼ連日訪問した。

亡くなった直後は、どうしようもない喪失感や孤独感に襲われた。特に朝起きるときと、夜寝るときがつらかった。

そんなある日、本多さんから手紙が届いた。ハナミズキの会への誘いだった。

た。最初は少し迷ったが、昨年6月、思い切って会に参加した。本多さんの顔を見ると、涙がこみあげてきた。他の遺族の話も聞く

と、身につまされた。淳一さんは生前、友達を大切にすう人だった。おかげで今も友人たちが心配して電話をくれる。「主人は生前『人は財産だ』と言いつづけていた。会に参加するうちに、改めて実感するようになりませう」と和子さんは言葉をかみしめる。

一方、同会は看護師らにとっても癒やし場の場になっている。遺族の感謝の言葉を聞くと、「自分たちのケアは間違っていないかった」という確信を得られる。

ハナミズキの会の問い合わせは、在宅部門(045・503・1289)。